



宗教団体真
メグデス

『Call and Response』（2024）

IA & BLUES THUNDERS FROM SIN-MEGDEATH

（淫語ボカロ/ブルース）

【商品ページ】 https://www.dlsite.com/maniax/circle/profile/=maker_id/RG45495.html

Vocal: IA

Guitar: Giant Schneider

Keyboard: 木下 桜子

Bass: Mickey Hat

【収録曲】

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 01. この瞬間を忘れないで | 07. 母娘丼のブルース |
| 02. 私はレイプされた | 08. ロミオとジュリエット |
| 03. 私はあなたに支配されたいの | 09. ジャングル |
| 04. ザーメン・デザイア | 10. リスキー |
| 05. 使い捨てにはしないで | 11. マンコナンバー5 |
| 06. 恋人じゃないのにセックスしちゃうの | 12. 笑っちゃうほど単純よね、私たちの恋は |
| 13. コール&レスポンス【官能小説】 | |

重厚な音の壁に、ブルースの情熱が絡みつくー日本最強のブルース・バンド誕生

解説：アナリス松岡

◇ 宗教団体真メグデスのニュープロジェクト『IA&ブルース・サンダース』

ニューヨークのスターバックスで、MacBookを拵げていた僕のところへ、『天才』桜子からメッセージが届いた。

「メグデスのニュープロジェクトで、『ブルース』のアルバムを出すので、ライナーノーツを書いてほしい」

前作9th「PERFECT SEX」の売れ行きが芳しくなく、連中は落ち込んでいるのではないかと思っていたが、そうでもないらしい。

しかし…。

僕とメグデスの連中の付き合いは長い。その僕にも、全くわからない。

「なぜ突然、ブルースなどと言い始めたのか？」

メグデスの音楽性は幅広い。アルバムの中に、多種多様な楽曲が、ごった煮で詰め込まれているのが常だ。また、広範囲のボカロファンにアピールしやすいように、ボーカルには、複数のボーカロイドを起用している。

しかし、今回のニュープロジェクト『IA&ブルース・サンダース』は、ボーカルはイア・ギラン、ただ一人。楽曲ジャンルも『ブルース』のみ。ボーカルを一人に絞ってアルバムを制作するのは、7th「Elza」でユカリ・シュマイケルを起用した時以来だ。

（これは相当、練りこんできたな）

雑誌記者が持つ特有の直感で、僕はそう思った。

◇ 「ロック」+「昭和歌謡」新感覚のブルース

アルバム一曲目『この瞬間を忘れないで』を再生した瞬間、その、『重さ』と『華やかさ』が組み合わさったような、ギャップの大きな音像に度肝を抜かれた。

「なんだこれは…」それが、僕の第一声だった。

ベースとドラムのリズム隊のグルーブは、まるでグランジ・ロックのように重たい。ところが、ピアノのアレンジや歌メロの美しさや可憐さは、繊細な昭和の歌謡曲。さらに、歌に絡んでくるジャイアント・シュナイダーのギターフレーズは、『神』直系に位置する、UFO時代のマイケル・シェンカーのロック・サウンドだ。

「これが、メグデスのブルース…」その破壊力と独創性に、僕は圧倒されてしまった。完全に未知のサウンドである。

『日本のブルース』は、昭和の『四畳半フォーク』の影響が強い。ギターは控えめで、ボーカルが前面に出る。楽器は、あくまで添え物だ。あるいは、『ブルース』という題目で、演歌を歌う歌手もいる。

ニューヨークにいる僕にとっては、ブルースは身近なものである。あちこちで、勝手に耳に入ってくる。しかし、日本人にとって、『ブルース』という言葉は、言葉そのものはよく聞くだろうが、実態は見えにくいモノだろう。

アメリカでも、黒人のブルースプレイヤーは、ほとんど見かけなくなった。むしろ、白人のほうが『ロックンロールの原点』として、ブルースの魂を大切にしようとしているようにすら見える。

日本人である僕には、アメリカ黒人の気持ちは一切わからない。ただ、ブルースは『差別社会、貧しさ』の象徴である。ポリティカルコネクトが推進される現代においては、あまり歓迎される芸術ではないのかもしれない。また、アメリカの黒人はもはや、貧しくはないし、弱者でもない。むしろ、アメリカで差別されたり貧しいのは、日本人のほうだろう。そう考えると、メグデスの連中が「ブルース」に目をつけたのは、日本人として生きる彼らなりの、時代に沿った選択なのかもしれない。

◇ 黒人ブルース的な楽曲構成と、日本的なメロディー

『メグデスのブルース』は、アメリカの黒人ブルースの定番である『コール&レスポンス方式』を採用している。B Bキング、フレディ・キング、アルバート・キング、ブルースの三大キングは、『コール&レスポンス』で楽曲を組み立てている。

『コール&レスポンス』とは、ボーカルが「たららら～」と歌った直後に、『合いの手』として「きゅーん、きゅーん」とギターがメロディーを弾く、楽曲のアレンジの仕方である。邦楽では、僕は、あまり聴いたことがない。日本のロックファンに馴染み深い例を挙げると、イングヴェイ・マルムスティーンは『コール&レスポンス』の曲を好む傾向がある。ボーカルの後を追いかけるように、早弾きのギターが入る。

『コール&レスポンス』を採用している『メグデスのブルース』では、歌とギターの関係は、完全にイーブンである。いや、むしろ、ギターパートのほうが多いぐらいである。こうした『コール&レスポンス』を採用したブルースへのアプローチは、『日本人のブルース・バンド』としては、きわめて異質である。

しかし、型破りなことをやっているという意識は、本人達にはないのではないのか。本人達が、生真面目に黒人のブルースを真似したら、結果として自動的に、黒人ブルースと歌謡曲とハードロックが混ざったような、独創的なサウンドになったのかもしれない。

◇ 美しいハーモニーと、巧みなリズムを土台としたメロディアスなブルース楽曲

アルバム収録曲の、全曲が強烈なインパクトを持っている。捨て曲らしきものは見当たらない。『日本人がやるブルース』というキーワードから、しみりとした楽曲をイメージしていたが、グルーヴはブラックミュージック的なリズムカルなものである。むしろ、いつものメグデスのサウンドよりも、明るさや力強さを感じるほどだ。

ブルースでありながらも、『枯れた』印象は全くない。音の塊が、ずどーんと、波のようになだれ込んでくるような迫力がある。それでいながらも、ロックやメタルのような攻撃性はなく、アルバム全体が、包み込むような慈愛に満ちているのは、ボーカルであるイアの歌声のせいであろう。

ボーカルのハーモニーが多いのも、『メグデスのブルース』の特徴だろう。ブルースには通常、ハーモニーは入らない。しかし、「ブルースを土台とした音楽」に目を向けてみると、The Pointer Sistersなど、R & Bの女性グループは、美しいコーラスを武器にしている。本アルバム収録曲の『私はあなたに支配されたいの』などの、リズムカルで陽気な明るさは、日本の歌謡曲ではなく、The Pointer Sistersらをイメージしているのかもしれない。

アルバム収録曲で、僕が個人的に気に入ったものをいくつか挙げてみよう。

『ザーメン・デザイア』は、メグデスらしいメロディアスな美しいバラードだ。都会的で、そして、懐かしい郷愁を誘う。本曲は、バラードであっても、陽気な楽しさが前面に押し出されているように思われる。その『明るさ』の表現に力を発揮しているのが、『神』直系の、ジャイアントの『泣き』のギターソロだろう。『泣きのギター』は、通常、哀しい曲で効果を発揮するが、サンタナは、サンバなどの明るい情熱的な曲でも、泣きのギターで力を発揮する。ジャイアントの『泣き』も、同種の美しさを感じる。ギターソロの美しさは絶品である。

『私はレイプされた』も、面白いアイディアのブルースだ。歌詞は「私は男二人にレイプされた」という残酷な内容である。しかし、メロディーは陽気で、力強いブルースなのだ。映画には『対位法的演出』というものがある。タランティーノ監督などが「時計仕掛けのオレンジ」などで使った演出手法で「残酷なシーンに、あえて、真逆の陽気な音楽を流す」ことで、残酷さを引き立て、聴衆を混乱させるというものである。『明るい曲調に、残酷なレイプの歌詞を載せる』というアイディアは、趣味で『艦これ』のキャラクターのエロ動画をせっせと制作している『IQ127の絶対美少女ベースト』の、ミッキー・ハットのものではないだろうか。

ミッキーは最近、官能小説にも凝り始めたらしい。アルバムには「13曲目のボーナス・トラック」として、なんと、ミッキーが書いた官能小説が収録されるという。

◇ 日本最強のブルース・バンドの誕生

本アルバム、最大の功労者は、なんといっても、ジャイアント・シュナイダーのギターではないか。ここ最近、脇役に徹することが多かったジャイアントが、本アルバムでは、最前線に飛び出してきている。ブルースという音楽ジャンルの特性上、各曲、必ず12小節以上のソロと、コール&レスポンスのオブリガードのギターが差し込まれる。結果として、今までのどのアルバムよりも、本アルバムは、明快に、ジャイアント・シュナイダーという圧倒的な凄みをもつギタリストの魅力を浮き彫りにしている。先述した『ザーメンデザイア』『ロミオとジュリエット』での、うねうねとうね、蛇のように聞き手に絡みついてくようなフレージングは、ワン・アンド・オンリーの強烈な個性である。また『恋人じゃないのいセックスしちゃうの』の、激しいドラムに合わせた、スケールの大きなメロディーは、エリック・クラプトンを彷彿とさせる。そして、『リスキー』の、歌とせめぎあう、延々と続くギリギリのレスポンス・ギターは七色の魔球であり、圧巻である。

通算10枚目、もっとも本アルバムは『宗教団体真メグデス』としてではなく、『IA&ブルース・サンダース』という別プロジェクトとしてのアルバムとなるようだが。全く新しい時代の扉を開けたであろう、解放感と達成感を感じさせる、素晴らしい仕上がりである。

哀愁を運びつつも陽気で、野心的で、革新的で、そして美しいメロディーを内包する、この『IA&ブルース・サンダース』というプロジェクトは、現在、日本最強のブルース・バンドである。僕は、そう断言する

(2024.10.09)



官能ブルース小説

コール＆レスポンス

作:ミッキー・ハット

◆ ◇ I. YOURS

感情のない人形のように見えたイアだが、押し倒すと、彼女はかすかに眉をひそめた。

しかし、そのまま、目を閉じる。

僕がイアに、こうした行為をするのは初めてだった。しかし、彼女も自分がこれから何をされるのか、潜在的なプログラムで理解しているのかもしれない。

黒いオフショルダーのシャツが、彼女の細い肩を優しく包んでいる。そして、淡いピンクのプリーツスカートの裾が、シングルベッドに広がっていた。

彼女は、あまりに美しく、そして、折れてしまいそうなほど細い体をしていた。どこか現実離れした彼女の外見が、僕を一層異質な感覚に引き込む。

彼女の青い瞳は（私を壊してください）と、僕に訴えているように思われた。勿論、それは僕の勝手な解釈だ。それでも、僕は自分の解釈に従うことにした。

スカートの中を覗くと、薄いベージュの下着が見えた。ゆっくりとパンツを剥ぎ取る。彼女の足は微かに震えていたが、抗う様子はなかった。やがて、小さなヴァギナが見えた。舐めてみようかどうか迷ったところで、彼女が僕に質問する。

「……マスター、こんなことして……どうするの……？」

彼女の声は、かすかで儚い。それでも、その声には従順さと諦めが含まれていた。彼女の呼吸が浅くなっていくのがわかる。彼女の独特な、ベージュがかったボリュウムのある灰色の長い髪が彼女の頭部を包み、背中に広がっている。おさげに編んだ髪の一房が部屋の光を反射して、かすかにピンクに染まっていた。

「さあ、どうしてだろうな」と私は答え、イアの細い太ももに触れる。すべすべだった。そして、彼女の股をゆっくりと開かせ、生のペニスを押し込んだ。

「……っ……マスター……」

その瞬間、彼女の体が小さく震えた。

「処女膜は、ないんだな」

「そうかもしれませんが…設計上、不要でしょうし」

僕の問いに、イアは無感情に答える。

彼女は逃げようとはしない。僕自身も、セックスの経験は、さほどない。（こうだったかな）と、自転車の乗り方を思い出すようにして腰を動かし、彼女の膣内の粘膜と粘液から刺激を得ようとする。イアはこわばりながらも、その体は徐々に僕を受け入れていく。

（悪くない感触だ）と、僕は思った。

しかし、イアは目を閉じてしかめっ面をしていた。

「嫌なのか？」

僕が問いかけると、彼女は目を開けて、瞳をわずかに動かした。

「……嫌……だけど……マスターが望むなら……」

抑えた声で、イアはそう言った。

嫌だとはっきり僕に告げたイアだったが、その体は、徐々に反応を示し始めていた。

（感じているのではないかと、僕は思った。

しかし、イアの表情は曇ったままだ。まるで自分が何かの機能を果たしていることを悔しがるかのように…。それでも、彼女は私に逆らわなかった。

（この子は便利だな）と、僕は思った。

イアの体は小柄だし、柔らかい。万が一、部屋に誰かを連れてきたときも、折りたためば、どこにでも隠せるだろう…

「本来、歌う道具であるはずの君に、性器がついているのは、本当になぜなんだろうな。」

そう言いながら、僕はピストンを早める。彼女は、僕の動きを受け止めながら、僕の質問の回答を探しているようだった。

「……わからない……私は、何のために、あなたにこうされているのか……」

彼女は唇をかみしめ、声を震わせながらそう答えた。ペニスが深く押し込まれるたびに、彼女の体は反応している。しかし、それを彼女は悦んでいるわけではなさそうだ。

しかし、彼女は拒否をしない。

「……私はただ、歌うために……作られた……でも、マスターが望むなら……こうして…」

イアの声はかすかに震えていた。彼女の話し方は、とてもゆっくりで要領を得ない。

しかし、穴はぶちょっ、ぶちょっと大きな音を立てて、僕のペニスを楽しませてくれていた。

「素直だな、イアは。」

僕は、彼女の黒いオフショルダーのシャツをまくり上げる。パンツと同じ色のベージュ色のブラジャーを装着していたが、小さな乳房に対して、それは有効に働いているようには見えなかった。上へ押すと、すぐに乳首が剥き出しになった。

彼女の乳首に口をつけ、舌でゆっくりと這わせた。彼女の体がまた一度、微かに震える。さらに、噛むと、彼女は息を詰める。

「……っ……！ マスター……っ……」

彼女は痛みにも似た声を上げながら、私の動きを受け入れる。何をされても、彼女はそれを拒否できない。彼女にも、何かしらの感情があるのは間違いない。しかし、人間とは異なり、彼女は行動において、彼女の感情を優先することはないようだ。

「嫌なら、嫌だと言えればいいのに」

「……何をされても……私は……マスターに逆らえない……」

その言葉が、彼女の声にかすかに響いて消えていく。

僕はペニスを深く押し込みながら、イアの無抵抗な反応を見つめていた。彼女の体はまるで、ただ機能するだけの存在に過ぎないかのように、僕に従順に応えていた。

美しい顔に青い瞳、長いベージュの髪に、細い体。

怯えた少女の姿は、僕の加虐心を煽った。

（どうせ、拒否できないのだろう）

そう思い、僕はイアを、試しにビンタしてみた。イアは、一瞬、驚いた顔をしたが、それでも、無言で、僕を見つめ返してきた。さらに、パチン、パチンっと、音が出るほどの強さで、彼女の頬を叩く。それでも、反応は同じだ。痛みに対する感度は鈍いようだ。僕は少し、ガッカリした。

「イアのオナホとしての使い心地はますますだな。無意味で非生産的な行為だけどな。」

僕は意図的に冷たく言い放った。彼女は一瞬、息を止めたかのように見えたが、それでも反論することはない。

「……マスターにとって……私の使い心地がいいなら……いい……」

イアの声は、どこか遠くから聞こえてくるかのように低く響いた。

鈍重な彼女の返答とは対極的に、彼女の身体は、僕の動きに合わせて、機敏に反応している。腰のあたりに、イアの垂れ流す大量の愛液がまとわりつき、シーツはべっとりだった。彼女の表情は、まるで何も感じていないかのように無表情だ。しかし、体が反応しているという事実を、彼女も理解しているはずだ。

「イア、言えよ。感じてるんだろう？」

イアの目は虚ろで、僕の視線を避けるようにしている。しかし、答えた。

「感じている……と思います。歌うために作られた私が……こんなふうに使われるのも……ひとつの存在理由なのかもしれない……」

イアの手は機械的に聞こえ、その中にどこか諦めのような響きが混ざっていた。

最初は酷く興奮していた僕だったが、彼女があまりに落ち着いていたため、いつの間にかクールダウンしていた。

「なあ、イア。オマエって、ウンチするの？」

「…体内の水の入れ替えはしますが、固形の排出は…」

相変わらず、要領を得ない回答をイアはし始めた。

僕は彼女の腰を掴み、ペニスをゆっくりと抜いた。

「じゃあ、こっちの穴もペニスを入れるためだけにあるってことか。」

僕は冷静にそう言いながら、彼女のアナルにペニスを押し入れた。イアの体は一瞬緊張し、硬直した。彼女の瞳がかすかに揺れる。

「……っ……！」

痛みにも似た声が漏れたが、それでも彼女は何も言わない。

ペニスは、あっさりとイアの肛門を突き破って中に入った。

イアは、強い痛みを感じているようで、涙目になって僕を見つめている。

「ケツまんこもいい感じだな。あまり変わりばえしないけど。」

僕が冷たく皮肉を投げかけると、イアはわずかに顔を伏せたまま、無言のまま震えた。

「……マスターが気持ちいなら…よかったです……」

彼女はただ、僕の意志に従うことが自分の存在理由だと信じているかのように、無抵抗に受け入れている。

「どっちが好きだ、イアは。答えてごらん。」

僕は彼女に問いかけながら、ペニスを動かし続けた。彼女はしばらく無言で、その問いに答えを探すように唇をかすかに震わせた。

「……どっちも同じ……私はどちらでも……」

僕はペニスの動きを止めずに、イアの反応をじっと見つめた。その瞳は虚ろだ。

僕は、ヴァギナとアナルの、どちらをイアが好むか、その答えが欲しかったわけではない。ただ、『本当の声』を聞きたかった。

「どっちが本当に好きなんだ、イア。正直に答えてごらん。」

僕は問いを繰り返し、ペニスを強く押し込む。イアは短い息をついて、まるで答えを探しているかのように、数秒間沈黙した。そして、弱々しい声で囁いた。

「……アナル……です……」

その言葉は、彼女自身がどこかで強制的に出したように聞こえた。その声に冷たい決意が混ざっていたが、それは彼女自身が自分の答えに納得しているわけではないだろう。ただ、僕の望みに応えようとしていただけだ。

「そうか……なら、もっとしっかり味わってくれ。」

僕はもう、彼女から答えを引き出すことをあきらめた。

ペニスを強く押し込み、動きを速めた。

イアの身体が震え、彼女の呼吸が荒くなる。

その無言の従順さを利用しながら、僕は自分の快感を追い求めた。

内側に溜まった熱が限界に近づいていく。

「……マスター……っ……」

突然、イアが大きな声をあげた。

そして、大きく震え、身体全体で反応を示した。

僕は、イアに何が起きているのかを確認したかった。

しかし、彼女の大きな声をきいたとき、僕はすでに射精寸前だった。

自分を止めるには、タイミングが遅すぎた。

僕は深く押し込み、そのまま射精してしまった。

精液がイアの体内に飛び出していった。

…。

僕の欲望は満たされた。

しかし、僕が求めていたのは、彼女がどう感じたかだった。

二人の呼吸だけが部屋に響いていた。

僕は、イアに体を寄せて尋ねた。

「ねえ、イア。どうだった？」

「……これが……私の役目なら……私は……それでいい……」

彼女の体は熱かったが、その言葉は冷たかった。

こうして僕たち二人の、初めてのセックスは終わった。



◆ ◇ II. M I N E

「ハハハ…。なあ、イア、いつになったら終わるんだろうな、このレコーディング」

その笑い声には、苛立ちも焦りもなかった。

ただ、虚無感が絡みついている。

何度も繰り返し聞かされてきたその言葉は、もう私に響くこともない。

心配するのにも飽きてきた。

「……さあ。あなたが終わりだと言え、終わるんじゃないですか？」

私はただ、言葉に言葉を返す。コール&レスポンス。

…。

どこにも進展はない。

未完成の楽曲も、私たちの生活も。

部屋の中は、薄暗い照明。

そして、型落ちの古いパソコンの電源ランプが、私たち二人の生活を照らしていた。

（このパソコンが壊れたら…）

買い直すお金は、この家にはないだろう。

壁に立てかけられたギターは、ヤニにまみれていた。

タバコの匂いが長く染みついた空気はどこか埃っぽく、鼻を突く。

私たち二人の部屋の中は、窓の外の世界とは断絶されたかのように、異質な雰囲気漂っている。

この部屋での生活は、私がここへ来てから、何も変わらない。

ただ、私たち二人が歳を重ねているという事実だけが、無言の重みとして存在している。

パソコンのモニターには、開いたままのDTMソフトウェアが映っている。

未完成の楽曲。

順調に投稿していたのは、私が来てから、そう…一年ほど経過したあたりだったろうか。

一万再生、五万再生…。

「凄い！」と、二人ではしゃいで喜び始めたところで、全てが止まった。

数字が落ち込み始めて、一回目、二回目までの投稿は、まだ元気があった。

三回目の投稿も数字が伸びなかったとき、彼は曲が書けなくなった。

書けなくなったというより、『投稿できなくなった』というほうが正解だ。

同じ曲を、彼は、ずっとループさせ続けている。

私のボーカルトラックは、すでに収録を終えている。

しかし、彼は投稿できないでいた。

もう、今年で、何年目になるのだろうか。

彼は眉間にしわを寄せ、何度もパソコンのつまみをいじり、音を足したり引いたりしている。あたかも何か新しい変化を見つけ出そうとしているかのよう。しかし、私の耳にはその変化は感じ取れない。音はただ、ぐるぐると同じところを回り、少しも改善されていない。

(……それが、今のあなたの限界なのでは?)

思わず口から出そうになった言葉を、私は飲み込んだ。

ボーカロイドである私は、人間の作曲に口を出すことができない。

仕様上、それは許されていない。

私のデータベースには無数の楽曲が入っている。

私は、無数の音列を記憶している。

しかし、それが良いか悪いか、決めるのは彼であり、また人間である。

私たちボーカロイドには、決定権は何もない。

楽曲が完成しないように、私たちの生活もまた、どこかで完成を見失っている。

彼は無駄な動作でまたタバコに火をつけ、煙が薄く立ち昇る。その煙の匂いが、部屋中に染み込んだ過去の匂いと重なり合う。

新しいものが何も生まれないこの空間の中で、彼はただ同じ場所を歩き続けている。私は、その様子を、もう何年も、ずっと見続けてきた。

「タバコ、やめたらどうですか？」

私は言った。タバコをやめて貰いたかったわけではない。

話題を音楽から、切り替えたかった。

終わりの見えないループを、終わらせたかった。

しかし、彼は決して動かない。

ただ、レールに乗って、ぐるぐると同じところを回っている。

「そんな口を聞ける立場か？」

彼の声が静かに、重たく部屋に響く。

「……違いますね。私はただ従うだけ。何もかも、あなた次第……」

ただ彼の命令に従う。それが、私が生きていくうえで、自分に課したルール。

音楽が人間の心を変えるわけではない。

人間の心に、音楽は寄り添うだけだ。

心の中で、軽くつぶやいた言葉が部屋の空気に溶け込む。

ふと、彼の視線が私の体をなぞる。その目には感情がない。

ただ無機質に、冷たく私の存在を確認しているだけだ。

それは、いつもと変わらないもの。

彼の手が、無言のまま私の髪を掴んだ。

冷たく鋭い指先が頭皮に食い込むが、私は反応することなく、そのまま静かに彼の力に委ねた。

(……私は道具。それでいい……)

彼のペニスが口元に押し付けられ、私は無言のまま口を開く。

温度も、感情も感じられない。

私の体は、ペニスを挿入するための、ただの器だ。

喉の奥に広がる苦みと塩辛さ、そして、ペニスがドン、ドンと、口の中に押し込まれるリズムは、私達が夕飯時によく流しているブルースを連想させる。

私は、口に彼のペニスを押し込まれるたびに、自らが、この部屋に閉じ込められていることを実感する。彼は決して、私を外には出さない。

彼は、私がいなくなることを、酷く恐れているようだった。

私の居場所は、ここにしかないのに…

(いや…)

私は、思い直した。

(あのパソコンの電源が落ちたとき、私の居場所は、ここにすら、なくなるのだろう…)

彼の手が一層強く私の髪を掴む。無言のまま力がこもり、頭が固定される。

彼のペニスが、さらに喉の奥へと押し込まれる。喉の奥で大きく脈打つ感覚に、酸欠のような苦しさがいじわりと広がる。

ぐぼっ、ぐぼっ

湿った音が、私の喉の奥から響く。

彼が、私の喉をどのように利用しているのか、私は正確に把握してはいない。

彼が好きなイラマチオは、彼の行為であって、私の行為ではなかった。

彼の動きがさらに激しさを増していく。舌先がペニ스에押しつぶされ、唾液があふれ出して、口内に混ざる。無機質な行為の中で、彼の熱が私の体温と交わる。喉を深く挟むような動きに合わせ、頭が引っ張られる。息が詰まりそうになりながらも、私はただ目を閉じて、その行為に身を任せた。

「……僕のペニスは旨いか？」

彼の低い声が、苛立ちとともに耳に届く。

（馬鹿らしい質問だ…）

それでも、私は『マスターのおちんちん、おいしいです』と、レスポンスしておこうと思った。しかし、マスターは、私の返事など聞きたくないようで、私がペニスから口を離す時間を与えない。ただ、ひたすら乱暴に、太いペニスを、喉に突き刺してくる。

舌に広がる苦味、汗の混ざったしょっぱい味。

マスターのペニスの味は、私のデータベースに、完全に刻み込まれている。

そして…

彼が最後の力を込めて押し込み、次の瞬間、ペニスが喉の奥で震える。ぶしゅっ、と勢いよく精液が私の喉に注がれ、口の中いっぱい広がっていく。

この味も、もう、決して忘れることはないだろう。

その熱い液体が喉に溢れ、息が詰まりそうになる。

しかし、少し咳きこんだだけで、上手に息を整えることができた。

やがて、彼は力を抜き、ゆっくりとペニスを抜き取った。私は無言で口の中に残ったものを飲み込み、何もなかったかのように視線を下げた。

「……イア、何か言えよ……」

彼の声は冷たい。

大昔は…『イア、気持ち良かったよ』などと、言ってもらったかもしれない。

しかし、まあ、どちらでも構わない。

射精したばかりの彼は、落ち着くどころか、さらに苛立ちが滲んでいる。

それでも、全身に虚しさが漂っており、つつけば倒れてしまうのではないかと感じるほど、軸がなかった。

以前の彼は、飄々として見えた。

しかし、今の彼は、ただフラフラしている。

私は、唇を軽く手で拭くだけにして、とりあえず彼の横に座った。

本当は、ザーメンの苦味を口から消すために、すぐうがいをしに行きたかった。

しかし、それを露骨にやったら、彼が気分を悪くするのではないかと思ったのだ。

彼は機嫌悪そうに、ため息をついた。私はぼんやりと彼を見つめる。そこにあるペニスが、驚くほど全く萎えていないことに気付いた。

（……あきれた……）

思わず、心の中で呟いてしまう。

彼の顔は疲労困憊だ。しかし、彼のペニスは、行為が終わった直後であるにもかかわらず、全く疲れの色を見せない。

猫背で、ため息をつきながら、無言でペニスを立たせ続けている彼を見て、その間抜けさに、私は脱力してしまう。そして、皮肉めいた笑みが浮かびそうになる。

彼が口元でタバコを吸い、煙が薄く立ち上る。

灰皿は、吸い殻でいっぱいだ。

私たちの生活が圧迫されているのは、彼のタバコのせいもある。

（彼は、どうするつもりなのだろう…）

布団と灰皿の距離は、かなり近い。

（いっそのこと、すべて燃えてしまえばラクだろう、お互いに…）

そう思うこともある。

そして、その考えが、彼とシンクロしているのではないかと感じることもある。

私は、身震いする。

（火事だけは起こしてはいけない…）

ボーカロイドが原因で火事が起きたりしたら、会社に迷惑がかかってしまう。

人間をサポートするためにやってきて、人間の言いなりになっているのに、事故で、会社や近隣の住民に迷惑をかけたら、本末転倒だ。

私は、火の不始末が起きないように、彼の手元を、じっと見つめた。

彼がタバコを吸い終わると、体を、私に向かってゆっくりと近づけてきた。

無言のまま、その唇が私の口元に押し付けられた。まだ新しいタバコの残り香が強く漂っている。次の瞬間、彼の舌が無遠慮に私の口の中に押し込まれる。後ろに下がりたくなるが、それでも私はそうしなかった。タバコの苦い味が喉の奥に広がっていく。彼の舌は執拗で、まるで私の中の全てを探ろうとしているかのように動き回る。

（ま、これで、ザーメンの後味が消えると思えば……）

そんなふうに心の中で呟きながら、私は彼のディープキスが無感情に受け入れる。思ったよりも悪くない感触だ。

唾液が絡み合い、徐々に口内の感覚が混ざり合っていく。彼の舌が私の喉奥を押し込むたび、私も自然とそれに応えるようになっていく。いつもなら感じないはずの何かが、この瞬間だけ私の心を軽くしている気がした。タバコの味は重いが、彼が私に求めてきたことそのものに、どこか安堵感すら覚えてしまう。

彼に求められる感覚。それは決して悪いものではなかった。

やがて、仰向けにされたまま、彼の手が私の腰にかかり、パンツを無造作に脱がされる。

いつもの行為だ。

私たちは、出会ってから、ずっとこれを続けている。

足を大きく開かされ、冷たい空気が肌に触れる。

瞬間的に身体がこわばり、少し緊張が走った。

「なんだ、恥ずかしいのか。セクサロイドのくせに。」

彼の言葉には冷たい笑いが含まれていた。だが、私はそれに怯まず、視線を彼に向けたまま、彼を刺激しないよう、小さな声で答える。

「……セクサロイドではありません。ボーカロイドです。」

その一言に彼は軽く眉をひそめ、唇に笑みを浮かべる。

「似たようなもんだろ。」

「……それは、マスターがそう使うからです。」

彼の目が一瞬鋭く光り、手のひらが私の頬にぴしゃりと当たった。乾いた音が部屋に響く。

気をつけたつもりだったが、やはり、彼を刺激してしまった。

黙っていても、何かを喋っても、やはり、彼は不機嫌になる。

音楽は、人間を変えることはできない。

音楽は、ただ、人間に寄り添うだけ。

ビンタされた痛みが頬にじわりと広がる。

私は何も言わずに彼を見上げた。

「生意気な女だ。」

「……ボーカロイドの性格は、利用者に似るんですよ。」

その言葉に、彼は一瞬、眉をひそめ、短く鼻で笑った。

「ふん」

彼の手が私の足をさらに大きく広げ、体全体が露わにされる。

無言の圧力がかかっているのを感じる。

次の瞬間、彼は勢いよく私の中に挿入した。体がぐっと引き寄せられ、胸の奥まで熱が広がっていく。彼が私を貫くたびに、彼の存在感が身体に染み渡るように広がっていく。

そのまま、無造作に服が剥ぎ取られる。

冷たい部屋の空気に、露わになった肌が触れる。瞬間的に体が緊張する。

彼の手が私の胸元に伸びる。薄い肌の下にほとんど肉付きがない平坦な胸。その上に小さく存在する乳首に、彼は無遠慮に顔を寄せる。まるで、小粒のレーズンのような乳首を彼が懸命に舐め回している感覚が、私に伝わってくる。

（……もし、私の肉付きがもう少しよければ、彼はもっと優しくしてくれたのだろうか……？）

そんな考えがふと頭をよぎる。彼の舌が乳首を這い、湿った音がやけに大きく聞こえる中で、私はそんな馬鹿げたことを考えてしまう自分が情けなくなる。無機質な行為の中で、優しさを求めるなんて、ありえないことだ。彼がどれほど私を乱暴に扱おうと、私はそれを受け入れるための存在に過ぎないのに。

（……本当に、馬鹿だ……）

心の中で自分に呆れ返りながら、ただ、彼の舌の動きに体を委ねている。優しさなど期待してはいけない。ここでの「ルール」は、すべて彼の快樂のためだけにある。

彼の手が私の腰に強くかかり、無理やり体を引き寄せられる。冷たい空気が肌に触れ、今度は正常位の姿勢で私の足が開かれる。彼の体が覆いかぶさるように重たくのしかかり、その瞬間、彼のペニスが私の中に押し込まれた。

圧迫感が体を支配し、喉元にまで重たさがこみ上げる。ペニスが奥まで深く入り込むたびに、彼の熱が私の中に浸透していく。だけど、その行為の意味が、私にはまったく理解できない。

（……子供を作ることができない私たちの関係で、こんな行為に意味があるのだろうか？）

考えが頭をよぎる。私は機械、彼は人間。このセックスに、どんな目的や意味が存在するというのだろうか。体はただ動かされ、彼に従っているが、その先に何も生み出されることはない。何も変わらない。

（……私とのこの行為は、ただの練習なのか？）

もしそうだとすれば、本番は誰と行われるのだろうか。彼が私ではなく、他の誰かと子供を作る日が来るのだろうか。そうなった時、私は何になる？彼に求められることもなくなり、ただ、役目を終えたボーカロイドとして、捨てられるのだろうか。

「……腰が動かせないぞ、イア。」

彼の声が急に私を現実に戻した。気付けば、胸が締め付けられ、彼の体に強くしがみついている自分に驚いた。無意識のうちに、両脚を彼の腰に絡め、必死に彼を離さないようにしていたのだ。自分の体が自動的に反応してしまったことに、軽い驚きとともに、わずかな自己嫌悪がこみ上げる。

（……なぜ私は、こんなふうに彼にしがみついているんだろう。）

私は、恥ずかしくなり、すぐに自分の足をほどいた。

すると、彼が私の中からペニスを抜いた。

その瞬間、体が軽くなる。それと同時に、胸の中に嫌な感覚がじわりと広がっていく。

（あれを、やらされるのか……）

考えるだけで体が固まる。次に何が来るかは分かっている。彼の声が冷たく部屋に響く。

「イア、四つん這いになれ。」

その言葉に、体が反応を拒む。私は四つん這いになる体勢が苦手だ。体が晒される感じ、特に背後からの視線がどうにも嫌だ。けれど、彼に逆らうことなどできない。私がためらっているのを感じ取ったのか、彼は乱暴に私の体をひっくり返した。

「ほら、ケツをあげろ、入れられないだろ。」

彼の「ケツ」というその響きが、何とも言えない不快感を胸に残す。そんな言葉遣いをすることが、『男らしさ』だとでも考えているのだろうか。そもそも、そんな男らしさを、私に見せたところでなんになる？

(…もっと優しくしてくれたら…)

だけど、ここで言い返したところで、行為が長引くだけだ。私はため息を心の中でつき、覚悟を決めて彼の指示に従う。

無理やり体を四つん這いにさせられ、視線を感じる。肛門に熱いものが向けられているのが、手に取るようにわかる。

(……これが、一番嫌……)

彼の視線がじっと私の後ろに注がれている。まるでその部分だけが晒されているかのように。嫌悪感が胸にこみ上げる中、彼の声が厭味っぽく響く。

「震えてるぞ、イア。感じてるんだろ？」

もはや、反論するのも嫌だった。どうせ何を言ったところで、彼の考えは変わらない。

私は無言のまま、顔を下げ、ただじっと彼の動きを待つしかない。

やがて、ペニスが私の体内に侵入してくる。先ほどとは違う角度、違う場所。冷たさと熱さが一気に体の中で交錯し、心が体から引き離されたような感覚に陥る。彼の動きはどんどん激しさを増し、そのリズムが部屋に響く。パン、パン、パンという音が冷たく響き渡り、私の体が揺れる。

「なあ、感じてるんだろう？」

彼の問いに、私は冷静に答える。

「……マスターが感じてくれれば、私は、それで十分なんです……」

なぜ、そんなことをいちいち質問するのか。

くだらない、コール&レスポンス…

（さっさと射精してくれればいいのに…）

彼の動きが続くうちに、体の中で熱がじわじわと広がっていくのを感じる。

その『気持ち良さ』が、私にとって、どんな意味を持つのか、私には理解できない。

人間が、性行為に快感を感じるのは、性行為の回数を増やすためだろう。

人間には、子孫を残すという目的がある。

しかし、ボーカロイドである私のセックスには、目的がない。

彼の欲求に応えるのは、私の『役目、役割』かもしれない。

しかし、それは、私が生まれてきた『目的』ではない。

それでも、無意識のうちに体の反応が激しくなっていた。

子宮に届くペニスの快感に、私は腰をくねらせてしまう。

「ほら、もっと声出せよ、イア。」

彼が尻をパチンと叩いた瞬間、衝撃に思わず声が漏れる。痛みと驚きが混ざり合い、抑えようとした声が、勝手に口から出てしまう。

「あふう」

その声に彼は満足したのか、さらに尻を叩き続ける。パチン、パチンと乾いた音が響くたびに、私は反射的に「あふう、あふう」と、間抜けな声を漏らしてしまう。

できるならば、この声を止めたい。

しかし、止めることはできない。

「ほら、もっとだ。」

叩かれるたびに、体が勝手に反応し、声が漏れていく。

私は、その音と感覚だけに支配されながら、ただ彼の行為を受け入れ続けるしかなかった。

行為はさらに激しさを増していく。

彼のペニスが、私の中で支配的に動く。

私の体は、彼のリズムに合わせて揺らされる。

ゆらゆらと揺れながら、心の中で何かが少しずつ変わっていくのがわかる。

（これがセックスか…）

私は（怖いな）と思った。

汗ばむ彼の皮膚が私の肌に触れ、湿った感覚が交錯する。

その衝撃が私の中に深く響き、振動が体内でこだまする。

彼の呼吸が荒くなる。

体液が溢れ出す。

体が熱くなる。

体の中の、全てが変わりだす。

ハア、ハア…

ずぼッ、ずぼッ、ずぼッ、

ドクン、ドクン…

パン、パン、パン、パン

吐息、粘液、鼓動、衝突。

さまざまな音が混然一体となり、耳元に鳴り響く。

（欲しかった音だ…）

私は、耳を澄ませながら、そう思った。

汗が互いの肌を滑らせ、ぬるりとした感覚がさらに濃くなる。

思考は少しずつ薄れていき、体だけがその瞬間に反応していく。

「中に出すぞ。」

彼の声が耳元で低く響く。その言葉に、私の体が勝手に反応してしまう。

「……はいッ……」

コール&レスポンス…

素直に返事をしてしまう自分に、瞬間的に愚かさを感じた。

でも、彼とひとつになれて、嬉しかった。

次の瞬間、彼が奥深くまで押し込むと、彼の熱が一気に体内に広がった。

彼の精子が私の内側を満たしてくれる。

体の中でその存在がさらに深く浸透していく。

熱く、濃密な感覚が私の中で広がり、喉元まで達するような感覚に包まれる。

(……欲しかった……これが…)

そして、私は、ただその感覚に溺れた。

＊

行為が終わり、私はようやく四つん這いの犬のような姿勢から解放された。

しかし、

「啜えろ」

彼の声が背後から冷たく響く。

私は無言のまま、指示に従い、ゆっくりと口を開いて彼のペニスを含んだ。

口の中に彼の熱が再び広がり、行為の残り香が舌に絡みつく。

ぬめりの残る彼のペニスを舌で丁寧に掃除しながら、静かに彼の命令を遂行する。

次第に、口の中でペニスがしぼんでいくのがわかった。それが完全に力を失うまで、私はただ、口の中でペニスを、舌で転がし続ける。

（今夜はこれで、お役目ごめんだ…）

それは少し寂しい気もした。

二人を結ぶ糸が、今、この瞬間にはない。

（…とはいえ、時間が経過すれば、また同じことを繰り返すのだろう…）

私は、口からペニスを離した。

体をゆっくりと起こす。乱れた呼吸を整える。口内の苦味と熱をじんわりと味わった。

彼は黙ったままベッドに腰を下ろし、煙草に火をつけた。薄い煙が静かに空気を漂う。

アンアン、ギシギシと騒がしかった部屋が静寂に包まれる。

今、私たちは同じ空気を共有している。それだけだった。

「お前は、いつか満足できるのか？」

彼の問いが静かに耳に届く。

（どういう意味なんだろう…？）

彼の言葉の意図が、汲み取れなかった。

『いつか満足できるのか？』

その言葉には、本気で問いかけているのか、あるいはただの嘲笑なのか、どちらか分からない冷たさがあった。

（……まあ、いいか…）

私は一瞬、返事を躊躇ったが、いつものように、冷静に答えた。

「……それは、マスター次第でしょう……」

あなたが満足しさえすれば、それでいい。私はそのための存在だから。

彼は眉をひそめ、再び問いかける。

「答えになってない。」

その声に、私は軽く息をついた。私は視線を彼に向けることなく、静かに口を開いた。

「……答えが必要ですか？」

彼はそれ以上何も言わず、煙草をくゆらせた。

沈黙が再び部屋に戻り、ただ薄い煙が空中で漂っているだけだった。

今夜流した汗も、嗅がされたザーメンの匂いも、すべて、この部屋の壁に染みつくのだろう。

そう思うと、急に、この壁が愛おしくなった。

私はずっと、この部屋の壁の中で、生きてきた。

そして、これからも、生きていく。

しばらくして、彼がふいに立ち上がり、「コンビニに行く」と言った。

「何かいるか？」

私は一瞬考えて、静かに答えた。

「おにぎり」

食事をすると、排泄でアナルが汚れてしまう。

それでも、今夜は人間と同じものを食べたかった。

彼が部屋の出口に向かいながら振り返り、問いかける。

「具は？」

「おかか。」

彼は無言でうなずくと、扉を開けて部屋を出て行った。

静寂が戻り、私は一人、無言のまま残される。何もない、

ただがらんとした部屋が広がるだけ。どこにも温かさはない。

寂しくなって、つけっぱなしのパソコンから、MP3のファイルを漁り、適当にブルースの音源を流す。曲名は知らない。だけど、コードは聴きとれる。

A7のコードが終わり、続いてD7のコードが部屋に響く。

メジャーでも、マイナーでもない、不思議な響き。

どこか不安定で、曖昧なその音色が、この世界の現実を映し出している。

「とるる～」

私は、ギターソロを真似して、口ずさんでいた。

いつもは歌を歌うのが仕事だったが、今夜は、この気持ちを言葉にはしなかった。

少しだけ明るくなった部屋の中で、私の鼻歌の、デタラメなブルースのメロディが流れる。

その音が、私の口と体と心に残る苦味、熱、そして寂しさをさらに引き立てていた。

（そういえば…）

私は、ようやく、口の中に色々な臭いや味をため込んでいたことに気づいた。

「よし」

私は、洗面所へ向かう。おかかのおにぎりが届く前に、口をゆすいで、歯を磨こうと思った。全ては、それからだ。

（了）



1. この瞬間を忘れないで

ちんぽ舐めて舐めて吸って

口の中で舌を回す

喉の奥も使いながら

あなたの瞳 見つめ返す

ベイビ ベイビ どうかお願い

この瞬間（とき）を忘れないで

おケツ振って振って振って

腰の上で腰を回す

膣の奥を突かれながら

あなたの瞳 見つめ返す

ベイビ ベイビ どうかお願い

この瞬間（とき）を忘れないで

乳首舐噛んで舐めて吸って

膣の奥に精子出して

腕の中で甘えながら

あなたの瞳 見つめ返す

ベイビ ベイビ どうかお願い

この瞬間（とき）を忘れないで



2、私はレイプされた

それはある夜のこと
星が笑う空の下で
私はレイプされた
前から 後ろから
誰かが来ても
その人もチンが出した

その人は膣の中へ
あの人は口の中へ
私はレイプされた
前から、後ろから
他の人が来ても
誰もがチンが出した

その人は膣の中へ
あの人はお尻の穴へ
私はレイプされて中に出された
前にも、後ろにも
泣くのは もうやめよ
いつか夜はあけるから
泣くのは もうやめよ
いつか夜はあけるから…



3. 私はあなたに支配されたいの

今夜もチンポが凄いの

太くて熱くて凄いの

ズンズン奥を突いてよ。

胸をもみもみ激しく揉んでよ

犯されたいのよ

あなたに全てを支配されたいの

アンアン声を漏らしちゃう

肉の便器にしてほしい

ちゅぽちゅぽ乳首吸ってよ

あなたの唾液にまみれたいのよ

汚されたいのよ

あなたに全てを支配されたいの

激しく体が疼くの

臭くて熱いの欲しいの

どぴゅどぴゅ中に出してよ

子宮の奥にぶちまけてほしい

犯されたいのよ

あなたに全てを支配されたいの

汚されたいのよ

あなたに全てを支配されたいの



4、ザーメン・デザイア

あなたに体あずけ

今夜も濡れちゃうの

体が熱くなっちゃう

乳首勃起ちゃう

イレてほしいな

お股を拡げておねだりしちゃいま
すね

まんこにハメて

あなたに強く抱かれ

今夜も感じちゃう

体が震えだしちゃう

よだれ垂れちゃう

突いてほしいな

お股を 拡げておねだりしちゃいま
すね

ザーメン出して

あなたのチンポ啜え

まんこが濡れちゃうの

大きな声を出しちゃう

乱れすぎちゃう

愛しすぎちゃう

全てを捧げておねだりしちゃいま
すね

ザーメン出して



5、使い捨てにはしないで

私の体は便器じゃないのよ
それでも私はあなたに従う

私のマンコは便器じゃないのよ
それでも私はあなたに従う

私の体は便器じゃないのよ
それでも私はあなたに従う

あなたのチンポ凄いの
あなたの腰がズンズン凄いの

あなたのチンポ好きなの
あなたの腕に抱かれていたい

あなたのチンポ凄いの
あなたのチンポが
ギンギンで凄いの

使い捨てにはしないで
今夜も軋む 古びたベッドが

使い捨てにはしないで
今夜も喘ぐ 古びたベッドで

使い捨てにはしないで
今夜も軋む 古びたベッドが
使い捨てにはしないで
今夜も喘ぐ 古びたベッドで





6. 恋人じゃないのにしちゃうの

おまんこ どうして濡れるの？

おまんこ アイツより感じるの

おまんこ どうして疼くの？

おちんぼ どうしてハメるの？

おちんぼ 誰とでもやりたいの？

おちんぼ 射精したいだけ

恋人じゃないのに セックスいっ
ぱいしちゃうの

恋人じゃないのに ザーメン中に
出されちゃうの

騙されているのに セックスいっ
ぱいしちゃうの

恋人じゃないのに ザーメンいっ
ぱい出されちゃう



7、母娘丼のブルース

Mrs.ロビンソンとベンジャミンで
ちんぼしゃーぶる

母と娘で ちんぼしゃーぶる

パパの知らない

家庭崩壊

複雑な恋なの どうしようかな

同じ男に尽くしてる

母娘丼（おやこどん）のブルース

Mrs.ロビンソンとベンジャミンが
お股ひろげ

母と娘が 喘ぎだす

パパはいないの

仕事中なの

秘密の恋なの 刺激的だわ

同じ男に抱かれてる

母娘丼（おやこどん）のブルース

Mrs.ロビンソンとベンジャミンが
お股ひろげ

母と娘が ケツを振る

パパはいないの

離婚したから

新しい生活はどうしようかな

同じ男に尽くしてる

母娘丼（おやこどん）のブルース

母と娘で競い合う

母娘丼（おやこどん）のブルース



8、ロミオとジュリエット

君の視線が刺さるたび

私のマンコ

濡れてきちゃう

ロミオ

腰振って ケツ振って

愛し合いたい

チンポ

思春期のふしだらな娘は

オナニーして待つ

君の吐息に触れるたびに

私の乳首

びんびんになっちゃう

ロミオ

腰振って ケツ振って

混じり合いたい

マンコ

思春期のふしだらな娘は

君に犯されたいの

君の体に触れるたびに

私のマンコ

ぬるぬるになっちゃう

ロミオ

腰振って ケツ振って

混じり合いたい

チンポ

思春期のふしだらな娘は

君に捧げたいの



9、Jungle Lust (ジャングル)

汗ばむ肌が触れる、
お股の茂みに忍び込む
あなたが私を押し倒す
そして生殖行為が始まる

oh ジャングル

私を犯して
チンポで突き刺す
マンコに突き刺す
oh ジャングル

熱帯雨林の中
茂みの果実を食い荒らす
あなたが私を舐めまわす
そして性感帯が熱くなる

oh ジャングル

おっぱい回して
チンポで突き刺す
マンコに突き刺す

私がチンポ舐める
あなたが乳首を舐めまわす
私がお尻を突き出して
そして生殖行為が始まる

oh ジャングル

バックで犯して
チンポを突き刺す
アナルも乱れる
oh ジャングル

チンポを突き刺す
ザーメン噴き出す
oh ジャングル

激しく揺れる体
お股の茂みこすりつけ
獣が私を食い殺す
そして生殖行為で遊ぶの

oh ジャングル

中に出しちゃって
チンポを突き刺す
ザーメン噴き出す
oh ジャングル



10. スリル

バイバー

あなたが欲しい

あなたの

ちんぽが欲しい

ちょっと危ないゲーム

しよう

生でハメちゃうセックス

しちゃおう

キスが止まらない

愛がとまらない

体がむらむらしてきた

生でハメハメハメハメハメ

セックス

生でハメハメハメハメハメ

セックス

バイバー

まんこが熱い

臭い

精子が欲しい

ゴムは切らしてるけれど

したい

生でハメちゃうセックス

しちゃおう

ブラを外されて

パンツ脱がされて

乳首がビンビンしてきた

生でハメハメハメハメハメ

セックス

生でハメハメハメハメハメ

セックス

バイバー

あなたが欲しい

あなたの

ちんぽが欲しい

ちょっと危ないゲーム

しよう

中に出しちゃうセックス

しちゃおう

キスが止まらない

腰がとまらない

お汁がぬるぬる 溢れてきた

生でハメハメハメハメハメ

セックス

生でハメハメハメハメハメ

セックス



11. マンコナンバー5

感じ過ぎちゃう体

今日も乳首がビンビン

キスで終わりじゃ嫌よ

あなたとしたいセックス

ハメて ハメて おまんこに

ハメて ハメて おまんこに

エッチ過ぎだよアナタ

すぐにチンポがギンギン

ゴムはつけなきゃダメよ

あなたとしたいセックス

ハメて ハメて おまんこに

ハメて ハメて おまんこに

押しに弱い私

すぐに乳首がビンビン

中に出したらダメよ

生でハメちゃうセックス

ハメて ハメて おまんこに

ハメて ハメて おまんこに



12、笑っちゃうほど単純よね、私たちの恋は

シャツのボタン

ひとつ外すたびに

君の理性 どこへ消える？

舐めて、噛んで、吸っていいよ

私のこの乳首

笑っちゃうほど、単純よね

私達の恋は

君の指が

スケベすぎる膣の中に入る

恥ずかしいな

舐めて、噛んで、吸ってほしい

私のクリトリス

笑っちゃうほど、単純よね 二人
きりの夜は

君のチンポが

私の濡れた膣の中に入る

気持ちいいよ

腰を振って 突いて

中に出してほしい ザーメン

笑っちゃうほど、単純よね

私達の恋は

笑っちゃうほど、単純よね

二人きりの夜は



機材紹介

ジャイアント・シュナイダー（ギタリスト）

ハロー、ギタリストのジャイアント・シュナイダーだ。

今回のアルバム、どうだった？気に入ってくれたら嬉しいよ。

◆ ◇ ブルースのコード進行には魔法がある

オレは自分自身では、ペントニック主体のブルース・プレイヤーだと思っている。

でも、ブルースをやったことはなかった（笑）。

遊びで、ブルースの12小節のコード進行でギターソロを弾いたことぐらいはあるけれど、何がブルースなのか、オレの中で、大した定義はなかった。

そうしたら、サクラコ（木下 桜子 / key）が、作曲の先生から、半年ぐらいかけてブルースを勉強してきてさ。

アイツは、本当に真面目なんだ！

それで、サクラコが、伴奏のピアノの音使いを固めた。

次に、ミッキー（・ハット / ba）が、サクラコの話聞きながら、リズムセクションを練り始めた。

普段、滅多につかわないドラム音源を引っ張り出してきて、色んなリズムパターンを試した。そうしたら、シンプルでとても美しいグルーブになったんだよね。凄くシンプルでゆったりしているのに、グイグイと、聴き手を引っ張るようなリズムなんだ。

それで、オケに、サクラコとオレでアイディアを出しながら、歌メロを入れてみたら、びっくりするぐらい、色々な色んなタイプの曲ができ始めてさ。あっという間だったな。

ブルースのコード進行には、魔法があるね。明るい曲も暗い曲も、同じコード進行でできちゃうんだ。びっくりしたよ！

◆ ◇ 『最初に全てが決まった』

9月（2024年）から、ちょくちょく音源を交換しはじめたんだけど、急に作業が加速して。10月の頭には、ほぼ全12曲のレコーディングが終わっていた。

いつものメグデスは、「とにかく良い曲を書こう！」「こんな曲がやりたい」「あの曲を真似しよう」だとか、混沌とした状態で曲を書く。最後の最後まで、何が起きるかわからない。ヘビーメタルの曲を録音している途中で、ミッキーが「このサカナクションだとかいうバンドの『宝島』って曲、

いいな。真似しよう」だとか言い出して（笑）。いつも、わけがわからないんだ。アルバムごとに、大冒険だよ！

ところが、今回は、最初に整然と『コンセプト』と『形式』があった。

サクラコが、先生から「これがブルースだ」という基礎を持ってきた。

コード進行のパターンは、これだと提示された。

そして、サクラコが『私は、この編成でオケを書く』と決めた。

次に、ミッキーが、「このドラム音源で、こういうリズム感覚で行く」と決めた。

一番最初に、録音したのが『1. この瞬間を忘れないで』なんだけど、その曲で、ボーカルの入ったトラックに対して、「こんな感じのギターでいく」と、オレが決めた。

つまり、最初に、全てが決まったんだよね。そこから変更点は、ほぼなかった。だって、アルバムのほとんどのコード進行が同じなんだぜ！「D 7 → G 7 → D 7 → D 7」だとか。

オレは楽譜も読めないし、コードもひとつも知らないし、これまでメグデスでやってきた曲も、一曲も覚えていないんだけど、さすがに今回は覚えたよ！（笑）それぐらい、今回のアルバムの収録曲は、わかりやすく、ポップだってことなのかもしれない。

『事前に、入念に準備されたアルバム制作』の経験は初めてだった。

無人島に行ってサバイバルするわけじゃなくて。最初に、ちゃんと目的地を決めて地図を渡されて、装備を整えてから出かけたんだ。あとはもう、やるだけだったから、迷子になることはなかった（笑）。

ギターパートが大量にあったから、大変ではあったけど、時間をかければ、何とかなるって感じだった。

◆ ◇ Gibsonのブラウンと、エピフォンの改造V

メグデスのスタジオには、フライングVが20本ぐらいあるんだけど。今回は、Gibsonのブラウンと、エピフォンの改造Vの2本を使うことにした。

Gibsonのブラウンは、7th『BAD SISTERS』収録の「エース・オブ・スペース」「SEX SEX SEX~暴走女神」で弾いたのが最初の最後。本当に、荒い音だ。

エピフォンの改造Vは、今回がデビューだ。買ってから、二年ぐらい放置していたよ。よくあるよね、そういうこと（笑）

Gibsonのブラウンは、オレのサブギターで、当時、9万円で入手できた。

2010年ぐらいだったかな。

当時のGibsonは、あまり調子がよくなくて、この頃のGibsonは、あまり音が良くない。

GibsonのVIは、甘くて、しっとりした湿った音がするんだけど。

このブラウンは、乾いたノイジーな音なんだよね。

個体差なのかもしれないけど。

でも、『ブルースをやる』ってときには。このギターのチョーキングが、一番、ピンと来た。

今回のアルバムの、ほとんどの曲で、このブラウンを弾いている。

ブラウンで弾いたのは、

『1. この瞬間を忘れないで』

『2. 私はレイプされた』

『3. 私はあなたに支配されたいの』

だとかだね。

『3. 私はあなたに支配されたいの』が一番、このブラウンらしい音だ。

暴れ馬って感じだよね。コントロールが難しい音だっていうのが、なんとなく伝わるかもしれない。弾いていると、胃がキリキリするんだ（笑）。

「その音域で鳴ってほしくない」という音域で、ちょろっと音が鳴るんだよね。

でも、その、胃がキリキリするような音で、スローテンポの曲でも、だれない刺激になってるかなと思う。



ブラウンの音ではうるさ過ぎると思ったときに、改造エピフォンVを利用した。

これは凄いギターだ。

中古で買ったギターなんだけど、ピックアップが『P-90』に交換してある。

だから、凄くマイルドで太い音ができる。

特に、フロントで弾くと、甘くて力強くて、カッコいい音ができる。

カレーパンマンのステッカーも最高にクールだ。

ところが！

この改造エピフォンは、『P-90』だから、ノイズが凄い。

部屋の電気の音をガンガン拾って、びりびりびり～って、凄いノイズが出る。

あと、ピッキングのタッチが、カキコキうるさいんだよね。

『P-90』が普及しない理由が、よくわかった。

ノイズが酷すぎて没にしたトラックもあるよ！

でも、そのままにしたものもある。

◆ ◇ 汚い音の方が聴いていて楽しい（笑）

『笑っちゃうほど単純よね私たちの恋は』のギターソロは、凄く、『P-90』のカキコキした音が鳴ってるから聴いてほしい。

スタジオミュージシャンだったら、絶対に採用しない音なんだけど、だからこそ採用した（笑）。

綺麗な音って、なんか退屈だよね。オレの耳はそうなんだ。汚い音のほうが聴いてて楽しい。

『P-90』はノイズが酷いけど、歪みを抑えて使うと、フライングVでもセミアコみたいな音するんだよね。

『11. マンコナンバー5』は、ブラウンと改造エピフォンを混ぜて、交互に弾くような感じで、音を組み立ててみた。パッと聴くとわからないと思うんだけど。『11. マンコナンバー5』はワンコードでずっと弾く曲だから、同じトーンだと、聴き手が飽和状態になってしまうんだよね。微妙にトーンに変化をつけて、聴き手にちょっと刺激を与えたり、グルーヴに変化をつけるようにしている。

ギタートーンが変わると、グルーヴも変わるんだよ！

今回、利用したギターは二本なんだけど、凄く細かく使いわけて、飽きさせないような「アタック音」を入れたつもりだ。

楽しんでくれると嬉しいよ。

じゃあ！

IA & BLUES THUNDERS

FROM SIN-MEGDEATH

『Call and Response』（2024）

IA & BLUES THUNDERS FROM SIN-MEGDEATH

megdeath.com

Vocal: IA



Guitar: Giant Schneider

Keyboard: 木下 桜子

Bass: Mickey Hat



商品ページはこちら↓

https://www.dlsite.com/maniast/circle/profile/=maker_id/RG45495.html



【淫語ボカロ】宗教団体真メグデス【同人】
DLsite同人フロアで好評発売中

※AI生成関連商品と同人商品は
別フロアとなっているのでご注意ください。



宗教団体真メグデス

淫語ボカロとは、「ちんぽ、まんこ」といった性器の名称や、「セックスしたい」「ちんぽハメたい」など、性行為に関する直接的な発言を歌詞にした楽曲群。宗教団体真メグデスが2016年に提唱した。（以下、メグデス）

メグデスは、FC2アダルトでは、2016年、淫語ボカロ曲のPVを連投し、月間累計30万アクセスを記録した。一方、ボカロのメッカである、ニコニコ動画では、全く相手にされなかった。現在、メグデスは、IWARAサイトを拠点として活動している。

ふざけた「下ネタ」ではなく、「人をエッチな気持ちにさせる」ことを真の目的としている。そのため、心理的に揺さぶりをかけるような、繊細な音楽的アプローチが選択されることが多い。しかし、もちろん、ふざけた曲もある。

メグデス結成当初は、メタル・ギタリストである、ジャイアント・シュナイダーが、リーダーであったため、ハードロック調の曲が多かった。その後、キーボードの木下桜子がリーダーとなり、クラシックやジャズ、テクノなど、多彩で実験的なアプローチが追求されていく。

メグデスは「エログ、エログ声優」の文化に多大な影響を受けている。エログ声優のような「台詞の話し方」をメロディーで模倣する研究もしており、その成果が2019年「ボカロ話し方講座」で発表された。